

【論文】

明治前期における笑い論の受容と展開

浦 和 男

Acceptance and development of laughter and humor studies
in the early Meiji period.

URA-MIYASAKO, Kazuo

要旨：明治期における諸学問の成立の背景は、すでに各領域から十分な考察がなされ、学問の受容と展開の歴史が明らかにされている。滑稽的な内容としての笑いではなく、笑いを科学的に論じる研究も明治期から本格的に取り組まれるが、笑いは一学問領域で扱われるべきものではなく、おかしみの笑いではない笑いの研究の歴史については、ほとんど取り組まれていないのが現状である。

本稿では、西欧近代思想に基づく笑い論が、明治20年代までの、近代化途上にある日本で受容され、展開する過程を、人物の交流関係も手がかりとして考察する。明治20年代までには、娯楽文化以外で笑いが注目され、滑稽の分析としての笑い論が展開する。日本での科学的な笑いの考察は、まず自由民権運動での演説の技術と関わった。20年代には、西欧近代思想を学んだ帝国大学卒業生たちの、領域を超えた交際を中心に、本格的な笑いの科学的な研究が発足し、日本の近代化の流れとともに笑いが論じられた。

キーワード：笑い、滑稽、ユーモア、明治文化、比較文学

1 問題の所在

明治期における近代諸学問の成立の背景は、各学問領域ごとに十分な考察が行われ、日本の近代化と諸学との関係が明らかになっている。一方、近年学問領域として確立しつつある笑いの領域における史的な研究は、いま

だに不十分で、明治期における笑いの在り方については未知の部分が多い。

飯沢匡は、明治期に日本人は笑いを忘れてしまったと指摘した⁽¹⁾。飯沢の「笑い」は、諷刺の笑いであり、たしかに諷刺の笑いは、富国強兵政策と近代化の進む中、政府の厳しい取締により先細りとなった。しかし、諷刺の笑いだけではなく、さまざまな笑いがあり、その笑いについての考察も、明治期に行われていたことは事実である。本紀要23-2号に発表した「明治期『笑い』関連文献目録」で、明治期には笑いが廃れることなく、末年に至るにつれ、笑いに関する文献が増えて行くことを明らかにした⁽²⁾。また、文学だけではなく、さまざまな領域で笑いを扱う文献が現れたことも、目録編集を通じて明らかとなった。

娯楽ではなく、笑いを学問の対象として論じる人々も登場してきた。近代化の中で、学界でも巷間でも、笑いは注目されたのである。それにもかかわらず、笑い論史的研究は未だ見られず、笑い論の果たした役割は解明されていない。

本稿では、明治初年から20年代までに、近代化する日本において、西欧の笑いの論考が、明治人の手によっていかに受容され、展開されたかを跡づけ、笑い論の史的な考察を試みる。

「笑い」は人間の生理的な現象であると同時に、さまざまな文化的現象を指し示す多義的な言葉である。本稿では笑いを誘引する要素である「滑稽」や「ユーモア」などを包括する集合概念として「笑い」を使用し、翻訳、笑いに関する研究、笑いの用法や効果に関する論考を総称して「笑い論」とする。

2 明治初年の受容と展開

2-1 医学的見地からの笑い

維新後まず、笑いの姿は生理学の立場から捉えられた。

6年11月、大坂（大阪）医学校の少教授であった松村矩明が、同校の教

師であったオランダ人医師エルメレンス（Christian Jacob Ermerins、越爾墨連士）の講義を訳述した「生理新論」（啓蒙義舎、大坂）を刊行した。「悉く晩近ノ講読ニシテ新異奇聞衆人皆ノ驚感シ各々筆記学習センコトヲ競ヘリ余モ亦タ其講義ニ在テ之ヲ記録セリ」とし、知識を秘伝にせず、広く知らせることを目的とした医学書である。和装四冊の巻三「変形呼吸運動」に「笑」の項があり、「笑ハ急卒ナル短呼吸ノ続々頻発スル者ニシテ毎空気声帯ニ触レ之ヲシテ震動セシメ声韻ヲ発スルナリ横隔筋モ亦タ其作用ヲ幫助スルニ由リ発笑劇甚ナルトキハ其収縮亦甚シク手ヲ以テ之ヲ抑制セサルヲ得ス顴骨筋及其他顔面神経ノ循行スル諸筋モ亦タ同時ニ収縮スレ亦タ不随意ニ出ツト雖モ練習スレハ随意ニ為ス得ヘシ」とある。

松村は天保13年生、越前大野藩の洋学所で蘭学などを学び、後に江戸で英学や医学を修めた。箱館戦争に軍医として従軍、その後大坂医学校へ移るが、14年に38歳の若さで逝去した。エルメレンスは7年来日、日本で最初に近代的な医学の講義を行った。この本は、10年6月に大久保常成の訳、村上俊平の校閲によって松村版の改訳と続刊が行われ、前編四冊、後篇七冊の和装本の「生理各論」（島村利助、東京）として出版された。ほぼ同じ内容だが、大久保版では「嗤笑」と訳されている。松村の逝去により、続刊は大久保らの手に委ねられた。大久保はエルメレンスの講義を受けた一人だが、村上についてはわからない。

笑いが横隔膜と関わるという生理学的見地は、地方の児童向けの本にも簡単に言及された。13年12月に出版された三好学編、大岩貫一郎校閲「生理小学」（栗田東平、名古屋）に、「呼吸ノ起ル理如何 呼吸ハ、胸腹ノ中間ナル横隔膜ノ伸張シテ、肺ヲ上壓スルヨリ起ルモノニシテ、乃彼ノ喜、怒、笑、泣、噴嚏 ノ如キモ、皆此膜ノ痙縮ヨリ生ズルモノナリ」という記述がある。

この本は、当時18歳で岐阜の小学校の校長を務めていた三好学が、「西語ニ曰健康ノ身体ニ精神アリト、然レバ則、生理養生学ノ人間ニ樞要ナル、亦明白ナリ、故ニ今其大概ヲ記シテ、小学児童ノ読本ニ供ズルモノナリ」

として編集した。簡単な記述であるが、笑いという現象は、早くから児童にも説明されていたことがわかる⁽³⁾。三好が参考にした文献は記述されていない。三好は文久元年生、幼年を岐阜で過ごす。岐阜の小学校教員を経て帝国大学理学部に学び、ドイツ留学、日本の植物学の基礎を築いた。大岩については不詳である。

2-2 演説と笑い

7年頃から始まる自由民権運動は13年から十年間程度高揚し、演説技術の向上が求められ、「雄弁」の解説書が多く出版された。雄弁のひとつの技巧として、笑いを引き起こす「滑稽」の長所、短所を論じる本も翻訳されている。

14年10月に出版されたアルデン著、真野観我（秀雄）訳「西洋演説軌範」（競錦書房、東京）は、欧米の著名人の演説方法などを紹介する。「滑稽頓智ノ効能（シドニー・スミス）」を含む。頓智、滑稽は「他ノ勝レタル判決力ヤ善キ才能ナド、一所ニ働クトキハ実ニ結構至極ノモノ」で、古今東西の有名な詩人、演説家、政治家は頓智、滑稽の才があったとする。最後に「吾人既ニ此ノ頓智滑稽ナル愉快ニ暮セル道具アレバ之ヲ活用シテ面白ク暮シ玉ヘ」とまとめる。原著書は「米国 アルデン」とのみ記載され、原典の言及もないが、Joseph Aldenの著作であろう⁽⁴⁾。真野は、当時慶応義塾の教員であった。

明治期の演説は文章の技法と関連し、レトリックの文献が演説の参考書として、しばしば紹介された。その一冊に、15年3月のクワッケンボス著、黒岩大訳「雄弁美辞法」（与論社、東京）がある。クワッケンボスはGeorge Payn Quackenbos、一般にカッケンボスと表記される。ニューヨークの学校長で、英語、物理学、数学、歴史など、さまざまな領域で多数の著作がある。明治初期から翻訳され、日本の近代化に大きな影響を与えた。原著の言及はなく、"Advanced course of composition and rhetoric: a series of practical lessons on the origin, history and peculiarities of the English language ; Adapted

to self instruction, and the use of schools and colleges." (1854年初版)のいずれかの版を利用している。この書は、美辞学、つまり修辞学の入門書として、早くから国内では広く知られていた⁽⁵⁾。「緒言」では、近来演説討論が盛んになり、その参考書が必要だが、言語の用法を主とした書が少なく、その用法を詳述するこの書を取り上げたという。

原著では"Part III Rhetoric"に"XLV. Wit"と"XLVI. Humour and Ridicule"があり、訳書は前者を「第七章 語辞ノ滑稽ヲ論ズ」と訳述している。その中で、滑稽は人をいたずらに笑わせることが目的ではなく、「滑稽ノ用ヲ知ツテ用ユルハ其目的ヤ人ヲシテ解シ易カラシメ且ツ記憶ニ便ナラシムルニ在ルナリ 俚耳ニ高談ヲ聞カシムルハ所謂ル馬耳ノ風ニシテ毫モ其功ナカル可シ 斯時ニ在ツテ滑稽ヲ用ヒサレバ彼輩ヲシテ耳ヲ我言ニ傾ケシムルヲ得ズ 之ヲ用ユル誠ニ止ヲ得サルニ出ルノミ 止ヲ得ズシテ之ヲ用ユル是レ滑稽ノ用ヲ得タル者ナリ」と滑稽、つまり笑いを呼び起こす術の使用を説明する。その滑稽とは、「主意ノ快ナルヲ以テ人ヲ楽シマシムルニ非ラズシテ 其主意ヲ説明スル方法ノ奇異ナルガ為ニ人ヲ楽シマシムル者ナリ」であるとする。そして、「滑稽ノ性質及ビ応用」として、(一)重大ナル者ヲ軽少ニ云ヒナス者（「日ノ将ニ出テントスルヤ東天ノ景色宛モ海老ヲ煮ルカ如ク黒色漸次ニ変シテ紅色トナル」）、(二)軽少ナル者ヲ重大ニ云ヒナス者（「第一種ノ反対ナルヲ以テ類例ヲ載セズ 少シク思考ヲ費ヤセバ其如何ヲ知ルニ足ラン」）、(三)関係ナキ説明ヲ為ス者（「彼ハ常ニ汚穢ナル衣服ヲ着セルヲ以テ之ヲ清浄ナラシメンガ為ニ余ハ一杯ノ酒ヲ呑マシメタリ」など）、(四)類似シタル言語ヲ両物ニ用ユル物（「此玉手箱ノ中ニハ多分宝物アラント開キ見シニ一物モアル事無シ 豈ニ驚カサルヲ得ンヤ 是レ玉手箱ニ非ラズシテタマガ箱ナリ」など）と四種に大別する。(一)は原文に少し手を加え、(二)は例文省略、(三)と(四)の例は訳者の手になる。

この「普通ニ用ユル者」に加えて「異性質ノ滑稽」を取り上げ、(一)一物ヲ両様ニ譬フル者（「有名ナル美人クレオパトラハ其顔色薔薇花ノ如

シト思ヒシニニ何ゾ凶ラン其心ハ荊刺ニ似タリ」)、(二) 初ニ虚事ヲ説キ一転シテ事実ニ移ル者(ジョーク一篇を例とする)、(三) 古語ヲ翻ヘシ用ユル者(「眼病ニ罹ル者アラバ宜シク歌人ニ良医ヲ問フ可シ 古人ニ言ハスヤ歌人ハ居ナガラ目医者ヲ知ル」)、(四) 通俗ノ方言ニ基ク者(「盲者ガ二階ヨリ落チテ鼻ヲ舞ハシタリ」)に分類する。この四種は、手元にある原著1861年版にはない。それぞれの解説も訳ではなく、訳者自身の解説である。(四)の「方言」は、通俗的な表現を意味する。

最後に「訳者曰ク」として、「此語辞上ノ滑稽ノ如キ則ハチ半ハ其国ノ習慣ヨリ来ル者ニシテ東西相通セザル者甚ダ多シ故ニ滑稽ノ一事ニ至リテハ翻訳ニ由ツテ其規則ヲ作ル可ラズ」云々の補足をする。

訳者の黒岩大は、黒岩涙香である。文久2年生、19歳で「雄弁美辞法」を訳出している。すでに「日本たいむす」などの新聞記者経験があり、自由民権運動にも関わっていた黒岩が、この種の書に興味を持ったことは不思議なことではない。出版の半年後に、黒岩は自由民権派の「絵入自由新聞」の記者となる。「序論」に校閲者である堀口昇は、共立学舎で尺振八(せきしんばち)に英語を学び、当時朝野新聞の自由民権派記者として知られていた。

黒岩の訳は、「我国ノ言語ニ照ラシ其ノ最モ当時ニ切ナル者ヲ訳述ス」とあるように抄訳となっている。例文は適宜日本人にわかりやすく変え、各所に解説を添え、西洋的理論を黒岩流に展開したものに仕上がっている。「滑稽」も、演説という発話行為での笑いの要因として、黒岩流に説明している点では、一つの笑い論として成立している。修辞学の立場から滑稽の分類を紹介した書としては、おそらく最初のものであろう。娯楽としての笑いではなく、政治運動の、それも自由民権運動の流れの中で、西洋的な発想の笑いが紹介されたのである。

この本は20年に第三版が出版され、多くの読者を得た。熊本の真宗の僧侶、加藤恵証も影響を受けた一人である。15年9月に出版の「弁士必携仏教演説指南」(布部文海堂、京都)には、「第十章 滑稽之用法」を収める。

真宗の僧侶向けの説教の話術の指導書で、千部発行と奥付に記載されている。

まず「第九章 八個之詞格」で話し方の態度を論じ、「格ノ第八」として「滑稽ナル体」を掲げる。「滑稽ナル体トハ戯言洒落ヲ以テ他ノ笑ヲ博シ興ニ乗セテ我論意ヲ感ゼシムルノ体ナリ 此体ヲ用ユル時ハ成ルベク論旨堅固鋭敏ナルヲ要ス 若シ主義ノ脆弱ナル者ニハ決シテ此体ヲ用ユベカラズ 然シ聴衆ヲシテ領ノ何レニ落シヤヲ知ラザラシムルニ至ラン」。第十章では、まず滑稽を定義し、「滑稽ノ事タル正方ニ非ズ変則ナリ 而シテ主意ノ快ナルヲ以テ人ヲ楽シマシムルニ非ズシテ説明方法ノ奇異ナルガ為メニ人ヲ楽シマシムル者ナリ」とする。

黒岩の「雄弁美辞法」では、「滑稽ノ事タル西方ニ非ラザルナリ変則ナリ」で始まり、先に引用した、滑稽とは「主意ノ快ナルヲ以テ人ヲ楽シマシムルニ非ラズシテ 其主意ヲ説明スル方法ノ奇異ナルガ為メニ人ヲ楽シマシムル者ナリ」という論述が少し先に現れる。「滑稽」の項では、全体として黒岩の訳文の順番を適宜入れ替えている。さらに、加藤は、「(第一) 重大ナル事物ヲ軽少ニ云ヒ為ス者」(「暁天ノ景色ハ海老ヲ煮ルニ異ナラズ黒色漸次ニ紅色ト変ズ」など)、「(第二) 軽少ナル事物ヲ重大ニ云ヒ為ス者」(「予ガ面部ノ痘痕ハ秦ノ世ニ在リテハ必要ナリキ 如何ト云ニ儒者ヲ埋ムルニ適当ナレバナリ」など)、「(第三) 我慢ニシテ我慢ナラザル者」(「余ハ色ノ白キ事鳥スニ勝ル者 弁論ノ爽カナル事啞生ガ三舎ヲ避ケタリ」など)、「(第四) 事物ノ齟齬ヲ云ヒ為ス者」(「其漁者ハ狼ヲ網ニテ射殺シタリ」など)、「(第五) 事物ノ当然ヲ云ヒ為ス者」(「彼人ハ足ニテ歩ミロニテ食ヒ耳ヲ以テ聞き眼ヲ以テ見タリ」など)、「(第六) 取止メ無キ洒落ヲ云フ者」(「盲人ガ二階ヨリ落チテ鼻ヲ舞ハシタリ」、「眼病ハ宜シク歌人ニ問ベシ 古諺ニ歌人ハ居ナガラ目医者ヲ知ル」)、「(第七) 狂体ナル詩歌俳句ヲ用ユル者」(「例ハ寝惚詩集一休一代記柳樽等ヲ披クベシ」と七種に細目する。

第一、第二は黒岩からの無断借用であるが、加藤は「雄弁美辞法」の分

類を、よりわかりやすくまとめた。こうした滑稽の目的は、娯楽ではなく、聴衆の気をひきつけ、睡魔を追い出し、厭きた気持ちを慰めるためであるとし、演説、つまり説教中に退出しようとする参加者を足止めすることが最も必要だとする。「此演説ヲ聴了シテ退散スル諸君ハ莫大ノ金銀ヲ拾フ幸福アラン 但シ落ス者無キ時ハ此限ニ非ズ」などの滑稽を使用すれば、「親ノ急病ヲ報ゼラレシ者ノ外ハ足ヲ止ムルヤ必セリ 是予ガ屢々実験セシ不動明王ノ秘宝ナリ」と、滑稽の使用が不動明王の秘宝という点は、仏教者らしい。しかし、当然、その使用はなるべく慎み、滑稽が過ぎると聴衆は仏教を軽蔑するようになると注意し、「滑稽ハ六七言ニ止ルベシ 何等ノ場合ニテモ一綴リ三十語以上ヲ用ユベカラズ」と具体的に述べる。加藤は黒岩の述を解釈して、より笑わせ方に踏み込んで説明している。真宗内部で、この書はどのように受容されたか、興味深い問題である。

22年2月に「(演説自在) 雄弁新法」(同盟書館、東京)を出版した湯浅誠作も「雄弁美辞法」に影響を受けている。校閲者は蟻川堅治で、湯浅も蟻川も不詳であるが、やはり自由民権派であろう。年内に改訂増補版が出された。

第五章で、滑稽を論じる。「滑稽ハ洒落ノ一種ニシテ落語家等ノ常ニ用スルモノナレドモ演説上ニ於テハ甚ダ卑劣野鄙ナルガ故ニ最も忌ミ最も避クベキモノナリ」であるが、難解な話は聴衆の耳に入り難い、だから「亦之レニ由テ思想ヲ述フルノ要ヲ生ズルナリ」と、演説での滑稽の使用を肯定する。そして、「滑稽ハ事物大小ノ比較、言語ニ類似、古語ノ翻用、若クハ単ニ言語及ビ方言ノ洒落」であり、「其演スル方法自カラ奇ナルガ故ニ思想ノ単一ナルモノヲ喜バシメ笑ハシメ以テ其目的タル思想ヲ容易ニ其人ノ觀念ニ注入スルコトヲ得」る。「雄弁」の手段として笑いを取りすぎること戒め、笑いが演説の感動の証ではない点などを指摘し、演説の態度に注意を与える。基本的な発想は、黒岩の訳本とほぼ一致する。

その後も類書が現れ、滑稽を扱うが、演説の一技巧とするにとどまる。20年代には滑稽演説と称する笑話本も現れ、演説と笑いは別の意味合いを

帯びた。

2-3 啓蒙書

西洋文化の導入に熱心であった政府の要職にある洋学者たちは、百科事典の翻訳を試みた。文部省編輯寮頭であった箕作麟祥は、イギリス、チェンバーズ社の"Chambers's Information for the People" (1833~1835)に注目し、4年から第4版の翻訳を開始、6年から16年にかけて分冊で文部省版、17年から18年に丸善版が「百科全書」として刊行された⁽⁶⁾。17年10月の丸善版「第三冊下巻」に、「滑稽」の項目がある。

まず「骨相学」の「第二十 滑稽」で、上下二段組み一頁を占める。訳者の長谷川泰は天保13年生、当時は大学東校で医学を教えていた。

骨相学では、脳は精神活動に関わる器官の集合体であると考えた。「滑稽」も精神活動で、脳に滑稽を司る器官があるとし、「此臓器ハ想像ノ器ノ前ニアリテ之ヨリ少シク下方ニ位ス 此器若シ大ナレバ顎ノ上部ヲシテ広潤ナラシム」と説明する。この骨相学的笑い論が明治期に影響を与えた形跡はない。しかし、その後否定された学問であるが、他の初期の文献にはない、笑い関連の指摘が随所にある。「此才知ニ由テ滑稽ヲモ目撃理會シ笑ナル感動ヲ覚悟スト云フニ至リテハ大抵諸家ノ一致スル所」として、滑稽と笑いの関係を指摘し、また「凡ソ獣類ノ中人類ヲ除クノ外一個モ笑フ者アルコトナク」として、笑いが人間固有の現象である点を指摘する。また、「差違ヲ判別シ若クハ類似スルコトヲ理會スル才智」、「事物ノ真正ナルコトヲ確定スル者」、「理會ヲスル才智ハ即チ差違ヲ理會スル才智」、「情意感動ノ器」とし、早くから笑いの発生に通ずる考え方を紹介した。

もう一点、「修辞及華文」に、二段組み下段程度の量で「滑稽、識刺、戯謔」がある。翻訳は、日本近代数学の基礎を築いた帝大理学部教授菊池大麓で、安政2年生、慶応3年と明治3年にイギリスに留学、ケンブリッジ大学で学位を取得した。箕作麟祥の従弟にあたる。

この項目でも、「滑稽亦感動ノ一種ニシテ其発スル恰モ人意ニ激中スルトキハ極テ其性情ヲ満足セシムルノ効アリ」とし、「畢竟滑稽ハ専ラニ文上ヨリ論ズレバ詞ノ品位ノ其主意ノ品位ニ適セザルトキニ生ズル者ニシテ即チ鄙猥ノ事物ヲ記スルニ莊嚴ノ文字ヲ以テシ高尚ノ題目ヲ論ズルニ野様ノ言語ヲ以テスルニ於テ生ズベキナリ」と、笑いの発生に関連させて滑稽を説明する⁽⁷⁾。19世紀欧米で展開される、対象物の「不一致（ズレ）」による笑いの発生理論の日本での先駆的な記述だが、この「百科全書」の記述が笑いの研究に影響を与えた形跡はない。

菊池は、「滑稽、識刺、戯謔」に、「リュデクロース、ウキツト、ヒュモール」とルビを振る。日本語にはridiculous、wit、humourに相当する語はなく、明治期に、これらの語句がどのように訳され、定着するか、今後の研究が必要である。

2-3 讀賣新聞「笑^{ゑみ}の説」

7年に刊行された讀賣新聞は、12年1月から解説、論説欄として「讀賣雜譚」の連載を始めた。同年6月5日に無記名で「笑^{ゑみ}の説」が掲載された。笑いは種々あるが、ほとんどの「笑ひは皆為にする所ありて真の笑ひに非ざるなり」、だから「真の笑ひを発する者は斯の如く度々あるものならんや」、世の中は貧富身分を問わず泣くことが多いので、「聊か感ずる所ありを作り以て世間の一笑を博す」とある。同時代の笑いを諷刺する目的で書かれたのであろう。

記者は、加藤九郎主筆と思われる。自由民権運動家で、9年から三年間禁固刑を受け、出所後に讀賣新聞に入社した。洋学の知識のある人物ではないようだが、当時の讀賣新聞は社長の子安峻以下洋学の教育を受けた社員が多く、加藤もその影響下にあるだろう。明治期を通じて、讀賣新聞は笑いをまじめに取り扱おうとする態度が見受けられる⁽⁸⁾。

3 明治20年代の受容と展開

3-1 大阪朝日新聞「笑^{わらひ}の説」

20年代には、本格的な笑い論が登場する。その先駆は、大阪朝日新聞の20年4月14日、15日、17日に連載された「笑^{わらひ}の説」である。

まず、「桑港毎週クロニクルに黙笑（スマイリング）の秘術と題し笑に声笑（ラーフ）と黙笑（スマイル）との二様ありて人類に声笑する事の始りてより遺伝して人類一般の資性となり 更に進化して黙笑を生じ以て今日至りたる迄の発達沿革を詳論したる者あり 左に抄訳して参考に供ふ」と始まる。laughとsmileについての早期の言及である。「黙笑」は冒頭の「スマイリング」以外は「スマイル」と読ませ、17日は「声笑」は「せいしょう」、「黙笑」は「もくしょう」と読ませている。

記事は、声笑と黙笑を生理学的に分析する。「声笑は胸隔膜と笑筋とに急激なる動作を起すに伴れ短急にして連続せる不明確なる声音を発するを常態とす 黙笑は毫も音を発する事なくして喜悅の入りを相貌に形表する者とす 二者元来同質に出ると雖ども其状に発する所大に異り声笑は寧ろ之を本質と謂ふべく 黙笑は其友属と謂ふて可なり」と述べ、声笑は「狂気即ち神経錯乱の所為に出るにあらざる以上は概ね心情の歡喜を啓表する者にして間或は嘲弄の意を含む事あり」、黙笑は「天の人類に特授せる賜にして獸類は都て声笑をするを得ず 唯目や耳の動作に由て殆んど人類の黙笑に類する状態を示す者あるのみ」と明確に区別する。そして、アリストテレス以来、数多くの学者が、解剖学や骨相学を含んで、さまざまな領域から笑いについて論じてきたことを述べ、人類に声笑が生じ、遺伝、進歩して黙笑となった過程、民族、地域による違い、などを紹介する。原文は未発見だが、訳者のコメントは挟まれていないようだ。

声笑、つまりlaughの発生についての解説はない。さまざまな学説があるが、「一は学説上より論じ来て単に声笑を以て一時神経の擾乱に由て発生する胸隔膜上の機関的動作に版し去るに在り」、「一は声笑を以て智力の

発達に出る者にして世効上に必要なりとし 殊に黙笑に至ては相貌上重大の關係ある者として益々之をして高尚の点に養成せしめんことを論ずるとのみある。

最後に「要するに人々十分に笑ふべし 然れども度に超ゆべからず 声笑黙笑共に相貌の美を失ふ事なく世交上に対し不敬に渉る事なき限りは適意之を發用して可なり云々」と結論を述べる。文明開化の時代に適応した、いわば近代的な笑いへの注意を喚起する目的を読み取ることができる。

3-2 土子金四郎と井上円了

20年代前半に、本格的な笑いの論考が登場する。この時期の近代的な笑い論の先駆的研究は、土子金四郎、井上円了、坪内逍遙、大西祝による。20年7月には黒岩訳「雄弁美辞法」第三版が出版された。西洋笑話の翻訳も登場し、20年6月に日本最初の英和对訳笑話集、牛山鶴堂（良介）篇「（英和对訳）西洋落語」（佐藤乙三郎、東京）が、25年9月に明治期最大の対訳笑話集である福沢諭吉の「（英和对訳）開口笑話」（交詢社、東京）が出版された⁽⁹⁾。

20年4月出版、土子の「洒落哲学」（哲学書院、東京）は、学生の武田富寿が筆記した書で、「総論」、「洒落の利害」、「洒落の種類」、「洒落の心得」から構成され、「滑稽」のうち、言葉の「洒落」を分析する⁽¹⁰⁾。洒落の本質は「一言数意」、つまり「アンビグキチー(ambiguity)」で、和漢西洋、詩歌文章、日常会話、あほだら経にまで洒落が味を添える。洒落は笑いの種であり、利害があり、その害は、なるべく除く必要があると述べる。そして、洒落を分類し、洒落の使用についての心得を多数述べる。「全体として洒落の墮落を防ぐために、新時代に適応した洒落のあり方をまじめに追求している姿勢が感じ取れる」と長島平洋は指摘する⁽¹¹⁾。

「洒落」は二種（一言数意、一言一意）あり、「一言数意」は二種（同音異意、同意異音）に区分され、「同音異意」は十一調（同音調、似音調、句切調、冠辞調、引語調、考落調、連続調、次語調、返語調、重語調、擬

人調)、「同意異音」は六調(形容調、判意調、統意調、反対調、同字調、字体調)に、「一言一意」は、三調(転倒調、略語調、挿語調)に下位区分される。

土子は17年に帝大文学部政治理財学科を卒業後大蔵省に出仕、19年から22年に東京高等商業学校教員、後に実業家に転じる⁽¹²⁾。「緒言」で、明治19年末に坪井九馬三と熱海養生中、坪内逍遙が同宿したので、「一日己が室に來り談終に洒落の事におよびたれバ日頃おもふよしを述べ洒落の種類などを説きたりき、然るにこの頃哲学書院此事を伝へ聞き來りて世に公にせんことを望む」と出版の事情を説明する。坪井は本書に「序」を寄せ、坪内は「跋」を巻末に寄せている。坪井は土子より5歳年長で、14年に政治理財学科を卒業後18年に理学部応用化学科を卒業し、当時は帝大講師であった。坪内は坪井と同歳、16年に政治経済学科を卒業し、当時は各所で英語などを教えていた。出版元の哲学書院は、その年1月に井上円了によって設立された。井上は土子より6歳年長、18年に帝大文学部哲学科を卒業している。⁽¹³⁾

井上の「哲学道中記」は20年6月に哲学書院から出版され、同じく論理学の立場からambiguityを分析しているが、笑い論ではなく、笑いとしての滑稽は、その一部として扱われている。「序」で、高尚な哲理を味の無い書で読書に欠伸をさせるよりは、「平凡解し易き文章と棒腹堪へ難き事実とを以て人をして一読百笑の下に文意を了せしむるは却て其益あるを故に此書縦ひ中等以上の学者をして哲理の蘊奥を知らしむるの益なきも中等以下のものをして哲学の一斑を窺はしむるの益あるは必然なりと信ず、読者請ふ之を一九の膝栗毛、三馬の浮世床と同一視する勿れ」と述べる。

続く「発端」で、哲学世界の入口である論理学を哲学道中のふりだしとして、「論理学は其实思想の学問なれども思想を取扱ふには言語の助けを仮らねばならぬを以て演繹法を論ずるには先づ言語の性質及び其用法を説かざるを得ず、若し其用法を述べれば言語には論理学の所謂汎意(ambiguity)と称するものありて一字にして多義を含み一言にして其意味

判然せざるものあり、此汎意よりして格別に論理の過失を生ずること多きを以て余は第一に汎意の事を論ずるなり」とする。「言語の汎意」を、「第一（語音より生ずる汎意）」、「第二（字形より生ずる汎意）」、「第三（連想より生ずる汎意）」に三区分し、さらに合計五十一種の複雑な下位区分を施す。

この書には土子が関わっていた。「跋」で、「余此書を編術して將に稿を脱せんとす適土子金四郎君、坪井正五郎君の來談あるに會す、余乃ち此稿を出して両君の批評を乞ひ亦大に得る所ありき」という⁽¹⁴⁾。しかし、二人の立場は正反対で、経済学者の土子は実用的な面からの分析であり、「洒落の容易と言語の完全とは正に反対の比例をなすものなり」、「凡てあまり深くひねくりては奇を求めて奇を失ふのならひにて面白味を損するものと知るべし」とするように、日常言語として笑いを誘引する滑稽を見、哲学者の井上は、実際の分析でありながら、言葉の美的な要素として滑稽をとらえ、いわば詩的言語として滑稽を見ている。

土子も井上も論理学のambiguityから始まる分析だが、坪井九馬三は16年に「論理学講義（演繹法帰納法）」を、19年にはその改正増補版を出版した。ambiguityへのこだわりは、坪井に何らかの手がかりがあるだろう。

土子も井上も、ambiguityに基づく分析を樹形図化して下位区分を示す。この方式はこの時期に頻繁に使用され、坪内が18年から「早稲田文学」に連載した「美辞論稿」でも随所に使用されている⁽¹⁵⁾。この樹形図は、まさに演繹的分析の見取り図である。ここから、西洋の論理学、修辞学の影響を強く受けて成立した「洒落哲学」の背景が読み取れる。翻訳ではなく、著者独自の視点で、笑いに関わる滑稽を分析、分類した点で、この書は画期的な内容であった。

しかし、土子も、井上も、笑いについての研究を意図したわけではない。土子は、22年4月に「話術新論（一名講談落語の論）」を、同じ哲学書院から出版した。この書は、「東洋学芸雑誌に落語改良論を出し今日の落語の改良すべきかを示したりした」（「序」）ことがきっかけとなった、講

談落語の改良論である。「話術新論」巻末に坪内の一文が掲載され、土子が早くから落語講談の改良を説き、「洒落哲学」は「話術新論」の「前駆」^{おききて}で、「話術新論」は「教導の書」とする。長島は、「この本はひとりの落語ファンが、改良運動の波の中で、自分が芸能の方向を支配出来ると信じ込んで、勝手に自分の夢を語っているような気がする」とし、「『洒落哲学』の方が江戸時代に流行っていた洒落を引きずって、明治20年代の現在（いま）、流れて崩れて使われている洒落を近代哲学の視点から見直しているような（一種の改良）、そんな気がする」と述べている⁽¹⁶⁾。

井上の「哲学道中記」もまた、哲学を近代教育の基礎と位置付けた人物が、「思想を取扱ふには言語の助けを仮らねばならぬ」として、土子と同じ立場に立つ。日本の近代化に関わる当時のエリート知識人が、まじめに笑いと取り組んだ態度は再考されなければならない。

3-3 坪内逍遙

坪内は、文学者の立場から文学における笑い論を数編執筆している。

21年11月発行「『ウキツト』と『ヒューモル』の区別」（「専門学会雑誌」二号）は未完の論考で、「頓智といひ滑稽といふは英語のWitとHumourとにアテたるなり」として、「滑稽は他の意之を迎ふるに随いて面白く頓智は他の不意に出る程度面白し」、「頓智は倏忽にして滑稽は永久なり」、「滑稽は行為に顕はれ頓智は言語に顕はる」と区別を大別する。witとhumourの区別としては最初のまともなものであるが、この区別と笑いの発生とは関連付けられてはいない。

29年9月の「文学その折々」（春陽堂、東京）に、「滑稽家」（25年9月「早稲田文学」二四号）、「^{ボン}Pun、地口、かけ言葉」（28年3月「早稲田文学」八五号）、「滑稽」（28年3月「早稲田文学」八六号）を含む。

「滑稽家」では、明治時代は笑いが少なくなり、滑稽と諷刺を以て登場した作家も次第にまじめな理屈を描きだした、ユーモアとパソスは人情の両輪であるが、明治の文壇はどちらかが欠けているとし、「笑に長じたる

者は、大に笑へ、泣虫の伝染にちぢむ勿れ、笑はば則ち大宇宙を笑倒せよ、然らざれば、現実と人間とを脱離して笑へ」と述べる。文学作品の「滑稽（好笑）」の少なさを嘆いているが、笑いを肯定的に捉えている。そのような明治文壇の、自選のユーモリスト作家を挙げ「文壇の五滑稽家」と称する。竹のやこと饗庭篁村（諷刺）、幸堂得知（滑稽）、南こと須藤南翠（諷諷）、正直正太夫こと芥藤緑雨（冷嘲）、尾崎紅葉（滑稽俳諧）である⁽¹⁷⁾。紅葉については「二人女房」の批評を述べ、「殊に滑稽の筆の軽妙なる、時としては落語めく嫌なきにあらねど、少なくとも小さん、円遊以上の口吻、モリエールが滑稽の間々落語めくを咎めずば、豈ひとり此の作者の筆のみを咎めんや」と批評する。

「Pun、地口、かけ言葉」は、英語のpunと日本語のかけ言葉を対比し、後者の技巧を高く評価する。「地口は是れ最下等文才」と言われ、日本の縁語、かけ言葉をも含めて考える向きがあるが、「地口又はpunと、我が所謂かけ言葉とは一見酷似して其の用間々異なり、^{ボン}「punは地口なり、地口は語^{フオド}の上の頓智^{ワイント}、概して一言両意なるが為に興あるのみ、他に何の用をもなさざるを例と」し、かけ言葉は「一語をして両意を兼ねしむるを眼目とせはせず、否、語を簡にすること、語呂を滑にすること、語を美にすること」を目的とし、「隠喩、直喩、等に比すべきもの」であり、「吾人は断として其の一種のfigureたるを信じ、少なくとも叙事詩体の風調分に於ては、国語の性質の太変せざる限は、軽々しく棄つべきにあらざるを信じ、かけ言葉は「類例なき一種の詞姿 (figure of speech)」とする。その点がわからない徒は、「まづ土子文学士が『洒落哲学』を一読し、さて後近松が作五六十篇を読破」してから意見を述べるべきだという。

「滑稽」も笑いを肯定するが、文学的な立場に立つ。「笑と涙はあざなへる縄の如し、笑ふとき必ず楽ありとする勿れ、笑極まりて涙流れ、涙蓋きて皺がれ声の笑となり、「涙を知らざる者の笑は、小児の笑にひとし」。しかし、それは一般人の態度ではなく、「理想の詩人、理想の人」の態度で、涙と繋がる笑いを賞賛する。

坪内の笑い観は、西洋文学批評あるいは文学理論に基づき、近代化の過程での小説の改良という立場に立ち、土子、井上らと同軸上に立つものであった。坪内のまじめな態度は、明治末期に大衆的な「滑稽小説」が氾濫する中で、健全な笑いに基づくユーモア小説を育む基盤を打ち立てることになる。

3-4 大西^{はじめ}祝

土子の「洒落哲学」をまじめに批評したのは、帝大哲学科の学生、大西祝である。「『洒落哲学』を評す」は、20年8月発行「国民之友」第七号に掲載された。大西は、洒落は「人心の一の著しき作動にして、こまかに其理合を研究するは心理学上の一の問題と見なして可なる」という立場から批評を試みる。土子の「洒落の洒落なる所は一言数意なる所にあり」とする説によると「洒落てふものは意義太だ広くして通常には洒落とは云はざるものも」洒落の範疇に入る。そして、「若し一言数意なるもの悉くは洒落にあらずば洒落なる一言数意と洒落ならざる一言数意とを区別する者なかる可からず 而して寧ろそを区別する其ものをこそ洒落の洒落なる所と謂ふべきなれ」と述べ、「土子氏が所謂一言数意は未だ洒落の大本を穿てりと謂ふ可らず 洒落のうち一言数意なるもの固より少からず、されども其洒落なる所は一言に数意を含めるの点に求む可らず 其含める数意の間に一種特別の関係を生ずるの点に求むべし 其関係によりて一種特別の思ひもよらぬ『をかしみ』を生ずるの点に求むべし」と、笑いの発生論に引き寄せて評する。「縦令ひ一言にして数個の意味を繋ぎ合はすとも其繋ぎ合はしたる意味の間に些かの『をかしみ』をも生ぜず 少しの『をもしろみ』をも生ぜずば其言は如何なる言にもあれ決して洒落にはあらざるなり 然らば一言数意なる洒落の洒落なる所を知らんとならば其一言にて繋ぎ合はしたる意味に如何なる相互の関係あるか且つ其関係は如何にして一種の『をかしみ』を生ずるかの問題を研究せざる可らず此等はまさしく心理学上の問題なれば心意^{マインド}の法則に訴へて説明すべきなり 惜しむらくは

土子氏は此問題に論じ及ぼされず」と指摘が続く。大西の考える「洒落哲学」とは、すべての言語に通じた性質を発見することにあつた。

最後に、土子が洒落の意味を超えて特別の意味を付していることこそが「アンビグキチー」であり、「洒落哲学」という書名とその内容との間に「をかしみ」を生じるという趣向があるのか、まじめな著作と信じて、まじめな批評を試みたが、なぜ「戯述」と書いてあるのか、まじめな著作を「戯」に見せかけるのは、それこそ「いらざる洒落」であると酷評する。この批評は笑い発生の本質を突き、西洋近代思想を受容し展開させた、日本初の科学的な笑い論と位置付けることができる。

大西祝は土子と同歳、同志社英学校で新島襄から洗礼を受け、卒業後帝国大学予備門に編入、22年に哲学科を首席で卒業、24年9月から大学院に籍を置いたまま東京専門学校（のちの早稲田大学）講師となり、坪内逍遙とともに早稲田文科の礎を築いた。31年からドイツ留学、健康を害し32年に帰国し京都帝国大学設立準備に関わるも、33年に36歳の若さで急逝した。

大西以外の書評は見つかっていない。「哲学会雑誌」第一冊第五号（20年6月）の雑報欄に「洒落哲学」と題して、「豫て落語改良論を主唱せられたる文学士土子金四郎氏は従来落語社会に用ひ来る所の洒落の種類を蒐集し其原理を論究して近頃掲題の如き書を著述せられたり其書中洒落の種類を分つと左表の如し」という、無記名記事と洒落の分類表が掲載されている⁽¹⁸⁾。

この雑誌は、井上円了らが主催し、帝大哲学科に基盤を置いた哲学会の会誌で、哲学書院から発行された。大西は、「哲学会雑誌」創刊の20年には哲学会会員であった。22年頃には編集にも関わり、23年になって最初の論文が掲載される。発表の中心は、同志社英学校の同級生、徳富猪一郎（蘇峰）の編集、発行になる「国民之友」であった⁽¹⁹⁾。

大学院在学中の24年3月、「滑稽の本性」を「六合雑誌」一二三号の巻頭に発表する⁽²⁰⁾。13年に東京基督教青年会から創刊された雑誌で、思想、文学、政治、社会問題など多岐にわたり革新的な論評を展開した。

最初に、滑稽を定義し、「『をかし』てふ心地を歓喜するものを総べ称して茲に滑稽と云ふ」とするが、笑うものがすべて滑稽ではないと注意する。「吾人は何故に笑を催す乎 その一般至極の因縁に至りては思ふに是れ一の難問題ならん」が、「予の茲に論ぜんとする所は凡て笑を催す時の心識の分析にあらず 又其因縁の推究にもあらず 只何を真に『をかし』と云ふかとの間に答へんとするのみ 即ち滑稽の滑稽たる所を發揮せんと欲するのみ」と、論稿の目的を明確に述べる。

滑稽の本性の通説は「物の不相応なる所」、「異風なるもの、奇妙なる物」とするが、すべてが滑稽の「をかしみ」を備えているわけではなく、「不相応」という性質で滑稽の本性、つまり笑いの発生を説明できるわけではない、とする。ショーペンハウエルは、二個あるいはそれ以上の物がある一点から見る時、「素と全く別の物と思ひ居たりし二物を突然一の概念に収めたる時に其概念と其二物との相応合せざるの関係（即ち幾分の相応の点を傍らに置いて却て著しくなりたる不相応の点）よりして『をかしみ』を生じ来る」とし、二個の物を一つの概念にまとめた時に感じる類似あるいは差異が著しいほど笑いを起こす程度が大きくなるとするが、突然発見したさまざまな誤謬や間違いも滑稽ということになってしまうと否定し、この説は「牽強付会」に過ぎたるものだとする。

次に、ホブズは「他人の突然羞辱を蒙り威厳を損ずの様を見る時はそを見る者が比較的自身を尊重感する所に『をかし』と云ふ快感を生じる」と説明するが、他人が突然汚辱を蒙っても笑いではなく、反対に厳格な心地が生じる場合もあると否定する。さらに、ベーンの「或事柄を『をかし』と思うひて笑ふ時は厳格窮屈なる有様から突然逃れて気楽なる有様に移るの心作用ありて而して其心作用は或事物が急に多祥の威厳を失ひたる場合に於て最も克く現じ来る」、つまり「心の張りの弛みたる時に思はず笑を催す」説を紹介する。酒の席でくつろいでいるときに、誰かが新しい洒落を言った時の場合は、この説はあてはまらず、窮屈な様からうちくつろぐ時に戻る心地は「をかしみ」を生じる原因ではなく、元の状態に「を

かしみ」を覚えての心的作用の結果ではないか、と否定する。ペーンは、アレクサンダー・ペインである。

最後に、こうした考説は、「孰れも皆長短ありて未だ一も滑稽の本性を十分に説明し得たるものとは云ふべからず」であるので、自分の考説を立ててみたいとする。それは、「スペンサー氏が『笑の生理』と題する論文にて笑ひを生ずる作用を専ら生理的の辺より巧みに説明せんと試みたる如きとは異なりて専ら心理的の辺に着目」する説であると述べる。

大西の説は、「似而非なるものが突然その正体を露はす所に真に滑稽の『をかしみ』の生ずるなり」である。「膝栗毛」の弥次郎兵衛は「似而非」な侍であり、突然その化けの皮がはがれる所に笑いが生じる。土子が「一言数意」の例とし、ショーペンハウエルの説の分析例とされた「胸に一物にもつは先へ」という言葉遊びは、「胸に一物にもつ」と読む時は、「一物」から「二物」という「みせかけ」の意味が浮かぶが、「にもつは先へ」と読む時は、「にもつ」は「荷物」とわかり、「みせかけ」の意味が「みせかけ」であることを見抜かれて「をかしみ」が生じる。つまり、「其者が恰も自分の正体と相符合せざるの有様に見えんことを力めて然して突然思はずも其正体を露はしたるかの如くに見倣してそれを『をかしみ』と笑ふ」のである。大西理論は、似て非なる二個あるいはそれ以上のものの間に違いがないようで、実は違いがあり、その違い、つまり対象となるものの本質を知ることでおかしさが生じ、笑ってしまう、ということである。違いを「差別^{けちめ}」と称している。その違いは場合に応じて異なり、ショーペンハウエルらの説には、その概念が欠如していると指摘する。笑いの発生する理由となる「事物の不相応」という性質は、「似而非なるものの似たる所と非なる所との相合はざるに存在」し、つまり「其物の見せかけと正体との不釣り合いなるに存在」する。ここに、ショーペンハウエルらの「不完全なる考説」で重要な点は、すべて新しい形となって自説に取り込まれたという。

大西は、自分の理性から発して新しい理論を打ち立てるとし、「迷誤を

排いて真理を発見し仮相を看破って真相を証得するは是れ吾人の理性に巨大なる満足に興ふるものにして而してそれに満足に興ふるによりて一種特別の快感を生じ来るなる」からだとする。滑稽の快感も、この理性の快感と同じように快感を与え、「仮面を見透して真理を露出さす所に理性の満足」が生じると、滑稽あるいは笑いというものを、単なる娯楽とは見ていない。「其由緒を質す時は必界至尊の理性が満足を表する野声に外ならざるなり」として、この論文の結語とする。

自らの理論は心理学視点によるものと明言して、笑いの知的認証による発生を論じる。手順には、美学的な発想が根底にある。金田民夫は、この論文によって「心理主義の立場における日本の美学が発足した」と指摘する⁽²¹⁾。理論の展開は、哲学思想の啓蒙的な様相も見せ、土子、坪内、井上らと同じ傾向に立ってはいるが、哲学、心理学、美学の理論を的確に理解し、咀嚼した上での、緻密な、学術的な笑い論である。先の書評で示した発想を発展させ、ここに科学的な日本の笑い研究も発足することになった。

論文末に「附言」として、「『洒落哲学』を評す」の一部が再録される⁽²²⁾。解説として、土子の説はショーペンハウエルに似てはいるが、「其思想の結構の精粗大小巧拙に至りては固より同日の論にあらざ一は黒うとの芸の如く一は素人のする真似の如し」という。一見酷評に思えるが、ここに大西流の「アンビグキチー」があり、「似而非」の発想が隠されているのではないか。ショーペンハウエルと土子の理論の比較と「みせかけ」ながら、「其思想」とは先行の書評とこの論文を差し、厳しい批評と「似て非なる」、大西流の「をかしみ」が込められる。先の書評中「いらざる洒落」の指摘も同じ趣向が隠されているとも考えられる。土子の論を否定するようにみせかけているが、土子の論があり、その書評があった上で、この「滑稽の本性」が成立している。これはまさに、ヘーゲル的aufhebenの発想である。それだからこそ、大西は書評を再録したのであろう。

大西は、土子を知っていたのであろうか。書評に、「予は土子氏の此著作は氏が洒落の理合を発見せんとのみじめなる研究心より出たるを知る

予は之を知るが故に少しくまじなる批評を試みんと欲す」とある。井上と大西は哲学科の先輩、後輩の間柄であり、「哲学会」などを通じて面識があり、井上の書評を「哲学会雑誌」に発表している。坪内とはは以前から面識があったようで、坪内が大西を早稲田に招いたとされる⁽²³⁾。大西と土子も交流があったはずだ。日本における笑いの科学的研究は、西洋の学問の洗礼を受けた帝大出身者の、知的交遊関係から始まるのである。

3-5 その他の笑いの論

22年10月に出版された今村長善「文章哲学」（今村長善、東京）は、「第一巻 文ノ体格」の「第二章 文質」に「滑稽（ルデクラス、ヒューモル、ウキツト）」がある。「第一巻」は「第一部」を意味する。

今村の経歴は不詳だが、新潟県士族で、東京府代言人であった。自らの事務所で出版物を扱い、奥付には本人が「著者兼出版人」となっている。

22年12月の讀賣新聞「稟告」^{しらせ}に欧米漫遊出発の三行広告が数回、23年5月に帰朝の広告が掲載された。23年8月13日に「生儀養病の為め当分帰県す」の広告があり、この後に没したのであろう。8年に成島柳北閣でイドワルド・クレシーの翻訳「宇内十五大戦記」（奎章閣、東京）を出版した。20年頃から憲法、法律、税制関連の本を出版し、英語リーダーも執筆している。

「凡例」によれば、第一、二巻は「主トシテ倍因氏修辞書ニ拠リ、傍ラ、カント氏スペンサー氏ケームス氏等ノ著ヲ参酌」している。倍因氏は、ペインである。"English Compositon and Rhetoric"（初版1866年）の改訂版が典拠であろう。

まず「嘲罵ハ、笑ヒヲ起スノ称ナリ」と総論を述べ、「作文上嘲罵ノ主タル言質ハ、直接間接ニ権力、官職、尊大ナルモノノ伴フタル或ル人又ハ快樂ヲ貶辱スルコトナリ、其他必要ナルハ、此貶辱ハ悲哀、憤怒、恐怖ノ如キ情緒ヲ生セサルモノナリ」とする。そして、「取笑ノ有様」は二点あり、一つは侮辱、屈辱など「害心ノ為メ権力ノ虧触スル快樂」で、一つは

愉快や親愛などの「嬉笑」である。次に、「罪ナキ嘲笑」、「害ナキ諧謔」が6種あり、「(一)其人ノ得意ニ非サルコトヲ屈辱スルトキハ、単ニ嘲笑」、「(二)其人侮慢スベカラザルニ、一片ノ諧謔ニテ笑ハルルモ耻ツルニ足ラズ」、「(三) 貶辱ヲ以テ謝意ヲ表スモノ」、「(四) 懇切ニシテ温和ナル感応ノ注入ハ笑フヘキ貶辱ノ院悪ナルモノヲ緩和ス」、「(五) 人ヲシテ愉快ナラシメントメ、自ラ咎屈シテ諧謔ヲナスハ、嬉笑ノ一ナリ」、「(六) 頓智及ビ詩ノ美麗ヲ嘲罵ト連合シテ嬉笑ヲ得」とする。(三)にのみ例が添えられる。

最後に頓智に言及し、頓智は不意、巧妙、滑稽の観念が連結したもので、「凡テ二様ノ意味ヨリ生ズル万種ノ言辞ハ不意、巧妙ノ体ヲ具フルニ於テハ」すべて頓智であり、「ポンス(地口)」と「謎語」も頓智である、とする。そして、「頓智ハ、嘲罵ト異ナルモ、多クハ連結セルヲ見」て、「嘲罵ヲ嬉笑ニ変スルヲ得」という。

きわめて難解な笑いの解説であるが、頓智という概念を出し、滑稽を頓智が発生する観念のひとつとして捉え、「地口」を滑稽ではなく、頓智として考える点は、他には見受けられない。これは、むしろ前近代的な笑い観である。今村は近代的な西欧の学問ではなく、幕末の洋学の教育を受けたことはまちがいない。ベインらの近代的な笑い論を、どれだけ理解できただろうか⁽²⁴⁾。

同じ文章論でも、26年4月に出版した「応用文章学」(東京、博文館)著者の松浦政泰は、近代的な教育を受けて正しく西欧思想を理解している。松浦は大西と同歳、同じく同志社英学校を卒業した。同志社女子学校などの教員を経て、日本女子大学校の設立に関わり、日本の近代女子教育に携わる。この「応用文章学」も英米の修辞学書を参考にしてしているが、同志社女子学校などでの講義内容を補足しているため、笑い関連の項目だけでも大変わかりやすい。

「緒言」には、参考とした文献が五冊記載され、ベイン、カッケンボスの著作も含んでいる。笑いは「第三章 嗜好快樂論」の第四節「笑謔」で

論じられる⁽²⁵⁾。「第一 笑諺の理論」では、簡潔ではあるが、欧米の理論を整理して紹介している。笑いの理論は「アリストートル以来、二千年間の一大問題にして、今に定説あるを見ず」とし、ホブズ、キャンベル（カムベルと記載）、ショーペンハウエル、スペンサー（スヘンソルと記載）の四人の説を簡潔に説明する。スペンサーの理論は「知覚の、不意に大なる物より小なる事物に移るとき、則ち低の不恰好あるときは、笑自ら生ず」とし、これはスペンサーの「笑いの生理学」理論の具体的な紹介としては嚆矢と思われる。松浦は、「孰つれも多少の真理を含むべし 要するに『奇異の湊合』『他の低』『不意の理會』『恰不好』等は笑諺の感を生ずる素なるか原如し」と各理論を一言でまとめている⁽²⁶⁾。

「第二 笑諺の原因」では、諧諺、滑稽、嘲諺を笑いの三原因とする⁽²⁷⁾。諧諺 (wit) は「更に關係なき事物に、新奇なる關係を有せしめ、以て驚喜なる感動を提醒するもの」で、「(一) 尊貴なる事物を卑賤に表するもの」、「(二) 輕微なる事物に、尊大なる語を被らしむるもの」、「(三) 奇異なる想像を以て、事物を奇異に表すもの」、「(四) 音韻同じきか、或いは意義を同じきとき、一事物を言ひて、他の事物を指すもの、即俗に所謂地口」で、それぞれ江戸文学から例を引く。(三)は、さらに「(イ) 一見すれば相反対せるか如き事物を、奇異に結合するもの」、「(ロ) 実義と修飾上の意義を混するもの」、「(ハ) 無形の事物に、實際有すべからざる、有形物或は人類の性質を附するもの」、「(ニ) 当然の事を其人の徳として語るもの」に分類し、「地口は詼諧中の最下等なるものなり」とする。

滑稽 (humour) は「諧諺の同情好意を帯ぶるものなり」で、「日光の如く、常に照らして楽しめ」、「心の感動と智性の觀念を含むを以て、詼諧より貴し」とし、諧諺は「電光一閃、忽ち輝て忽ち消ゆる」として、ホイップルの説を紹介する。

嘲諺 (ridicule) は「滑稽の、諷刺譏諷の気を帯ぶるもの」で、「正正の陣を張て堂堂議論するに足らざるときに、之を用ふれば、反対論者は、反

駁する能はずして、其の効驗却て多し」とまとめる。

これまで「滑稽」と「笑い」が同義に使用されてきたが、初めて「笑」と「滑稽」を区別し、笑いの発生の要因として「滑稽」が扱われた。また、笑いの発生理論を簡潔に紹介し、wit, humour, ridiculeを区別したのも、この書の特徴である。地口を最下等とするなど欧米の修辞学そのままの発想も見られるが、近代的な笑い論を的確に理解し、日本文学に応用した点は、笑い論の大きな展開を示している。

23年12月に出版された元良勇次郎の「心理学」（金港堂、東京）には、「第十四章 笑」の章がある。元良は安政5年生、大西、松浦と同じ同志社英学校出身で、ボストン大学などで学び、博士号を取得後21年に帰国、23年から帝国大学教授となり、近代心理学の基礎を築いた。大西とは23年に「哲学会雑誌」で倫理学関連の論争をし、「六合雑誌」にも論考を発表している。

「人ハ笑フ動物ナリ」と笑いが人間に特有であることをまず述べ、「笑ヒハ精神上ノ高尚ナル活動ニ基スルモノニシテ、其ノ原因種々アリ」、笑いを四分類する。「微笑（精神ノ高尚ナル快樂ヨリ起ル笑ヒ）」、「偽笑（偽リノ笑ヒヲ以テ他人ノ歡心ヲ買ハントスル…最モ甚ダシキ誤用ニシテ社会ニ毒害ヲ流スノ根本トナルモノ）」、「嘲笑（己レト他人ヲ比較シテ自身ガ他人ニ勝リテ決シテ復タ其人ニ降参スルノ必要ナキヲ明カニ知ルトキハ他人ヲ目シテ一種ノ快樂ヲ感ジテ笑フモノ…倫理上大ニ嫌フモノナリト雖モ又普通一般ニ存スル人性ナリト云フベシ）」、「滑稽ノ笑（思ハザルモノ、事ニ触レ興ニ乗ジテ現ハレ出ヅルコト）」と解説する。さらに「滑稽ノ笑」は、「若シ其ノ現ハシ出デタルモノガ自身ノ危難ニ関スルカ或ハ精神ニ苦痛ヲ興フルトキ」は「驚愕」となり、「危難ナク又苦痛ナキトキ」は「滑稽」になるとする。「思ハザル関係ヲ表ハシタルモノニシテ実ニ滑稽ナルモノ」として、一休の「極楽はいつくの程と思ひしに 杉葉立てたる又六が門」などを例示する。最後に「滑稽ノ笑ヒハ多クハ倫理ニ反スルコトナク却テ精神ノ疲レタルトキハ之ヲ快活ニナシ為メニ大ニ益スルコト

アリ」と指摘している。第二十一章「表出」では、「笑ノ表出」として、笑いを生理的に分析する。

元良は、西欧的な理論を紹介し、あるいはそのまま当てはめて笑いを扱うのではなく、心理学の立場としての自説を論じた点、笑いの生理的な側面を解説した点で、特徴ある笑い論となっている。しかし、その解説には、本人の倫理的な潔癖さ、性格的なまじめさが現れ、中立的な態度での見解としては不十分である。

心理学的な研究は小学校の現場も関心をもち、心理学の美学的な視点から、教育と笑いについて論じる教員も現れた。26年10月に渡辺嘉重は「美育論」（普及舎、東京）を出版し、美学的な要素を教育現場で活用することを論じた。27年の平沼秋之助「茨城県教育家略伝」（進文社、茨城県銚田町）には、渡辺は安政5年生、茨城県土浦高等小学校訓導兼校長とある。いくつかの私塾で学び、14歳頃から小学校教員となり、働きながら各種免許を取得、若くして茨城県の教育界を推進する一人として活躍していた。校閲は西村正三郎であるが不詳、国立国会図書館書誌情報では（1861—1896）とのみ記載されている。

「第三篇 美育の二」に「第十二章 嬉笑の快樂」がある⁽²⁸⁾。嬉笑とは「快樂の俄に来るとき、発表するもの」で、「嬉笑を起す原因は、多くの事物の不恰合」と「検束の状態を脱するとき」という。子供が大人の帽子を被って靴を履いているのを見たり、生徒が授業を終えたときに、笑いが起こる。嬉笑は、「不恰合を認知する」ことで起こるというが、すべての人が「不恰合」を認知をせず、認知する能力は「天性に依る」。また、嬉笑の種類として「諷諷、滑稽、調諷」などがあるとするが、その説明はされず、「此等は多く利用すべきものにあらず、唯児童が課業に疲るゝの時、興に乗じて満堂を笑はしめ、以て疲れたる精神を回復するあるのみ」としている。前半は、ペインの説である。

普及舎からは、松島剛、田中登作、佐藤亀世、橋本武の共訳で「倍因心理全書」が19年に出版された(未見)。西村正三郎は、松島と田中が校閲者

となり、ダントン著「心理学之応用」（20～23年、普及舎、東京）を翻訳している。その「例言」によると、この三人を中心に尚友会という輪読会を組織し、原書講読もしていたという。松島は、スペンサー著「社会平権論」（報告社、東京）を14～16年に七分冊で刊行し、スペンサー・ブームを引き起こした。安政元年生、慶応義塾などで学び、17～18年に茨城県水戸中学の教頭を務めた。同世代の渡辺は、この頃松島と知り合い、影響を受けたのであろう⁽²⁹⁾。

渡辺は、教育での笑いの問題をいち早く取り上げたが、「嬉笑」を起こす「滑稽」を、教材に使うといった発想はない。25年に出版された福澤諭吉の「開口笑話」の「序」には、教育での笑いの効用が説かれている。進歩的とはいえ、前近代的な教育を受けた在郷の教育者の限度があった。しかし、この書から、20年代前半には、欧米の笑い論が比較的広く普及していたことを伺い知ることができる。

3-6 翻訳書

これまでに判明している理論の翻訳は、意外と少ない。当時の知識人たちは、原書を通して近代的な笑い論の知識を得ていた⁽³⁰⁾。

アレクサンダー・ベインの著作は早くから翻訳されていた。"Mental and Moral Science"（初版1868年）は、19年から数年かけて「倍因氏心理学」（林繁樹、東京）として矢島錦蔵訳で出版される。目次には、第三卷、第十三章、第十八節に「滑稽」があり、「第一節 笑駭ノ原因」、「第二節 不相当ハ必ズシモ滑稽ナラズ」、「第三節 滑稽ハ其人ノ失策ニ依リテ生ズ、笑駭ノ学理、アリストートル、クエンテリヤン、ホップス、カムペル、カント」、「第四節 失策ノ愉快ハ（一）勢権ノ意相（二）束縛ノ救助ニ関係ス」とある⁽³¹⁾。この章は国会図書館蔵書になく、ここまでは訳されていないようだ。今日一般に「ズレ」と訳されるincongruityの訳語が、目次で「不相当」と訳され、大西、松浦らの著作の「不相当」、「不恰好」などが、incongruityの訳語であることがわかる。矢島は不詳、後に東京府尋常

市販学校教頭、群馬師範学校校長を務めている。

ベインのこの書は、すでに15年に井上哲次郎抄訳、大槻文彦校「倍因氏心理新説」（同盟舎、東京）があるが、笑い関連の項目は見当たらない。前節で言及した松島剛らの訳書は、国会図書館の書誌情報では原文第四章の記載があるので、該当箇所を含んでいるはずである。

ハーバード・スペンサーの"The Physiology of Laughter"（初出1860年）は雑誌論文で、後に"Illustrations of Universal Progress"（初版1864年）などに再掲された。スペンサーの翻訳書は多数あるが、"The Physiology of Laughter"は見当たらない。現在、「哲学会雑誌」第一冊第四号（20年5月）の「雑報」に掲載された無記名の「アトランチック月報」記事の要約、「嬉笑ノ原理」が最初の紹介と思われる。スペンサーの論文を「嬉笑の生理」と訳している。ボストンのThe Fireside Pressから発行された"The Atlantic Monthly; a magazine of literature, science, art and politics"、1887年3月号（Vol.LXI, No.CCCLII）の"The Contributors' Club"に無記名で掲載された"Laughter as a Mode of Expression"に基づく。

20年10月に出版されたトーマス・ハクスリーとウィリアム・ユーマンスの城泉太郎訳「通俗進化論」（金港堂、東京）の後篇第六章「スペンサー氏ノ予約出版方」に「発笑生理論（ぜ、フィジヲロジー、ヲフ、ラフテル）」の名がある⁽³²⁾。訳者の城泉太郎は、自由民権運動家であった。城は安政3年に長岡で生まれ、3年に慶應義塾に入塾、5年から9年頃まで義塾の教員を勤め、徳島、高知、和歌山、長岡などで英学を教えた。昭和2年に憲兵隊の取り調べを受けたさいに、自著の原稿を焼き捨てたため、資料が極めて乏しい人物である。スペンサーの理論を知っていたかどうかは、明らかにできないであろう。

「哲学会雑誌」第二冊第十四号（21年3月）の「論説」に、「哲学会雑誌編輯員識」、「ユーリングス、ジャクソン」の「洒落ノ心理」が掲載された。「洒落ハ人ヲシテ楽マシムル者ナリ 人ヲ楽マシムル者ハ学者ノ應ニ研究スヘキモノナリ 曩ニ士子文学士ハ洒落哲学ヲ著述セラレタリ 洒

落果シテ一種ノ哲学ナルヤ或ハ之ヲ哲学ト名クルモ一種ノ洒落ニ過キサ
 ルカ 歐洲ノ学者ハ未タ洒落哲学ヲ知ラサルカ如シ 然ルニ近刊ノ通俗科学
 月誌ニ洒落ノ心理ト題スル一篇ヲ揭示セリ 其論スル所甚新奇ナルヲ以テ
 今爰ニ之ヲ抄訳シテ洒落研究者ノ参考ニ供ス」と前書きがある。この抄訳
 の掲載は、註18に記した「哲学会雑誌」前号の土子批判の延長にある。こ
 の時期の「書記」は、沢柳政太郎と上田万年であり、同年9月から大西祝
 が書記となる⁽³³⁾。この「編輯員」は誰か。どのようにして、このような雑
 誌記事を知り得たのか。抄訳とはいえ、医学系の記事が早くから紹介され
 たことは、明治期の笑い論受容の多様性を示している。

原著者はJohn Hughlings Jackson、イギリスの認知神経学者で、脳損傷の
 研究で知られている。原典は、ユーマンスが編集をしていた"The Popular
 Science Monthly"、1888年1月号に掲載された"The Psychology of Joking"であ
 る。この論文は1887年10月にジャクソンがロンドン医学会で講演した内容
 に基き、その講演は"An Address: The Psychology of Joking"として、"The
 British Medical Journal"の1887年10月号に掲載されている。

Charles Everettの"Ethics for Young People" (初版1891年)は、27年4月に
 渡辺又次郎訳で「越氏倫理新篇」(金港堂、東京)として出版された。第
 三十三章「滑稽に就きて注意すべきこと」があり、原文は"Fun"である。訳
 者は東京法学館、哲学館などで教え、33年頃には第五高等学校教授、その
 後水戸高校初代校長を務めた人物らしい。この章では、滑稽の使用につい
 ての注意を与える。章末の「訳者曰はく」に、「本章の説く所は人に勤む
 るに滑稽を行はざるべからずとするにあらずして、全然滑稽を欠くことあ
 るべからずと忠告するものと知るべきなり」と解説がある。原文と対照す
 ると、fun, ridicule, comical, joke, jestなどが使い分けられているが、訳文で
 は「滑稽」と「嘲弄」が訳語の統一なしに使われている。そのため、滑稽
 を否定的に取らえている内容にも読み取れる。笑いに関連する様々な語彙
 の訳語が、この時期に、まだ定まっていないこともわかる。36年9月に大
 浦肇らによる新訳「青年倫理学」(東京、晴光館)が出版されている。

4 結語

文明開化とともに欧米近代思想が受容され、笑い論は諸学問の立場からの受容に付随していた。受容の第一の過程は、原典を原文で読み、直接知識を得るものである。第二は、直接知識を得た人物の解釈を通して日本語に直された知識を得る場合で、論文の場合もあれば、勉強会や読書会、あるいは授業を通しての場合がある。第三は翻訳が媒介になる場合である。明治初年も、21世紀の今日も、これらの過程は同じであるが、明治前期は圧倒的に第一の場合が多かった。第二も、第一と大差なかったが、第三の翻訳は、明治期前半には少なかった。

この時期に受容された笑い論は、演説への応用、近代的思想への「改良」の手段、文章作成への応用、と展開する。近代化という方向と、笑い論も切り離して考えることはできない。笑い論の展開が今日と大きく異なる点は、特定の間人関係が笑い論の展開に積極的に関わっていることである。まず、何らかの交流関係があり、そこから笑い論の展開が見られる。

本稿では十分に論証できなかったが、初期には自由民権運動の流れと笑い論の受容、展開が関わってくる。「雄弁」術のための笑い論の展開がある。自由民権運動が欧米の思想を受容する中で、笑い論との関わりを考察する必要もあるだろう。松島剛の系列では、教育現場に携わった人物たちがいる。また徳富の流れから大西へとつながる。

20年代前後には、土子、井上、坪内、大西、元良といった帝大系列の人脈が笑いに関わる。大西、井上、元良は「哲学会」の関係者であり、この線上には、明治期後半に笑いに関わる和田、夏目、三上の名がある。大西、元良、松浦、また蘇峰は、同志社英学校の卒業生であった。大西と坪内は東京専門学校＝早稲田大の系列となる。この系列は、明治後期に笑いに関わる人物を多数排出している⁽³⁴⁾。土子も早稲田大学で教鞭を執った。漱石も早稲田で教えている。

22年の大日本帝国憲法発布とともに、笑い論は本格的な展開を始める。

こうした知的な人脈によって育まれた笑い論は、日本の近代化の路線と重なりながら展開し、27年の日清戦争開戦、翌年の終結の時期までには、一通りの展開を終える。この時期の笑い論は、教育が整備される30年以降に、さらに別の展開を見せてくる。明治時代は笑いが廃れるどころか、さらに本格的に笑いが論じられたのである。笑いの研究は今日ようやく始まったのではなく、すでに日本の近代化の過程の中で始まっていたことを、今改めて認識する必要があるだろう。

【註】

- (1) 飯沢匡、「武器としての笑い」、1977年、岩波書店、東京、参照。なお、本稿では、明治期については年代のみ表記し、他の時期については元号を添える。参考文献については、西暦表記とする。
- (2) この点は、「明治期の笑いを笑う」と題して、日本笑い学会第17回総会で口頭発表を行った（2010年7月10日、於関西大学）。目録は、森下伸也、浦和男、岡村志以、「明治期『笑い』関連文献目録（1）」、『人間健康学研究』1-2号、関西大学人間健康学部、2011年、に20年までの増補を掲載している。
- (3) 「家庭雑誌」第拾五号（26年10月）の「科学」欄に、無記名で「筋肉の話（笑面と泣面）」（94~98頁）が載った。科学的な解説ではなく、顔面の筋肉作用がわかりやすく書かれ、「笑筋」^{わらひすじ}、「高慢筋」^{こうまんすじ}などの用語を使用し、笑いの発生を説明する。この雑誌は、徳富蘇峰が前年9月に「家庭雑誌社」から刊行した。
- (4) NDL-OPACはArudenと表記しているが、読みをローマ字化したものであろう。
- (5) 島村瀧太郎（抱月）述「美辞学（東京専門学校邦語文学科第2回1年級講義録）」（東京、東京専門学校）には、この書が「体裁やや雑駁所説また陳りたれど平易にして大体を領するに難からず。審美的のところもありて批評を重ずるは此の書の特色なり。初学一読の価値あり。」とし、参考書の一冊となっている。この本は出版年の記載がなく、明治30年代半ばの出版と思われる。
- (6) 文部省版では12年の刊行らしいが、未確認である。松永利男、「チェンバーズ『インフォメーション・フォー・ザ・ピープル』復刻版 全2巻+別冊 監修のことば」、Eureka Press ホームページ、参照。（<http://www.aplink.jp/ep/4-902454-13-0.htm>）
- (7) この項目は、アレクサンダー・ペインの"English Composition and Rhetoric"の解説の集約であることを菅谷廣美が検証している。『「修辞及華文」の研究』、1978年、教育出版センター、東京、201~202頁、参照。
- (8) 浦和男、「明治期『讀賣新聞』と笑い」、「笑い学研究」18、日本笑い学会、2011年、参照。当時の讀賣新聞は総ルビだが、一部のルビのみ添える。
- (9) 浦和男、「明治後期における西洋笑話と英語学習書」、『文教大学文学部紀要』

- 22-2、2009年、(英語学論説資料保存会編、「英語学論説資料」第43号、2011年、英語学論説資料保存会、東京、に採録)、参照。
- (10)長島平洋、「日本最初の笑い学研究 土子金四郎『洒落哲学』」、「笑い学研究」16、日本笑い学会、2009年、参照。
- (11)長島前掲論文、82頁。
- (12)一橋大学学園史刊行委員会篇、「一橋大学百二十年史：captain of industryをこえて」(1995年、一橋大学、東京)、「第一篇 商法講習所の設立から大学の昇格まで」31頁に、土子についての言及がある。41年5月出版渡辺慎治編「天才乎 人才乎(現代実業家月旦)」(東京堂、東京)は、実業家の土子を紹介する。自ら落語、講談を弁じ、実業家にあらざるような洒脱な人物で、若い頃から、「笑面」あるいは「喜楽亭笑面」を号とした。硯友社の「我楽多文庫」活版公売本第一号(21年5月)には、「社友」として「本郷 土子笑面」が記載されている。他に、饗庭篁村(讀賣新聞)、文字三味楼(東京電報新聞)、南新二(大和新聞)、礪川喜望(団々社)、真木痴囊(団々社)の名がある。21年10月発行「日本文学」第三号には、「歌は洒落より出づるか洒落は歌より出づるか」と題する論考を発表している(未見)。また、三遊亭圓朝「名人長二」(29年3月、博文館、東京)の序文を執筆している。土子と笑いの関わりについては不明な点が多くある。
- (13)土子、井上、坪内の三人は、20年頃に開学したばかりの成立学舎女子部で、土子は経済学、井上は哲学、坪内は文学を教え、原書による講義を行った。経営者兼校長は、帝大を16年に卒業した中原貞七であった。嘉悦大学創始者の嘉悦孝子が当時在学し、土子に教わっている。嘉悦大学図書館嘉悦情報メディアセンターホームページ掲載「嘉悦孝子伝」第7章参照。
(<http://kimc.kaetsu.ac.jp/takaden-text/chapter07.html>)
- (14)井上の「跋」に名のある坪井正五郎は、土子の1歳年長、19年に帝大理科大学動物学科卒業、当時は大学院生である。自然人類学者で、42年に「自然滑稽うしのよだれ」(三教書院、東京)を出版、やはり洒脱な人物であった。
- (15)初出連載雑誌は確認できなかったが、「逍遥選集」第十一巻(1927年、春陽堂、東京)では樹形図が確認できる。
- (16)長島平洋前掲論文、84頁。
- (17)坪内を含め、全員讀賣新聞に作品を発表していた。
- (18)「哲学会雑誌」での最初の土子批判は、第二冊第十三号(21年2月)の「雑報」に掲載された無記名記事、「哲学の名義」(47~51頁)である。「哲学」の定義を問う記事で、当時「哲学」と冠しながら「哲学」とは無縁のものが多い点を批判し、「彼の洒落哲学に至りては殆んど哲学の名義を蒙らすべき者にあらず土子文学士の所謂洒落哲学は前人の未だ曾て云はさる所なるのみならず如何に彼の三十餘家の哲学定義に附會せんとするも決して能はざるなり 然らば氏の哲学は従来哲学者間に慣用し来れる哲学にあらざること明なり 若し果して然らば吾々は土子氏の吾々が為めに勉強し為に研究する哲学てふ二字を遠慮なく

明治前期における笑い論の受容と展開

- 用みられたるを怒むなり」という。
- (19) 平山洋、「大西祝とその時代」、1989年、日本図書出版センター、東京、107~108頁の「哲学会雑誌」の編集委員等の資料には、22年度の「哲学会」の委員に、大西と並んで和田万吉（国文科）、三上参次（国史科）の名前がある。和田は37年に「西洋笑府」（吉川弘文館、東京）でドイツ笑話の翻訳を出版、三上は38年に桜木章の「滑稽文学より観たる幕末史」（「側面観幕末史」として東京の啓成社から出版）の校閲をしている。24年度に大西の名はなく、夏目金之助（漱石）の名がある。蘇峰はスペンサーに強い影響を受けているが、スペンサーの笑い論を知っていたかどうかは、わかっていない。
 - (20) 該当号は、「友愛労働歴史館」間宮悠紀雄事務局長から、同館所蔵のデジタル版の提供を受けた。大西の雑誌論文は「大西博士全集」第7巻（1903年、警醒社、東京）に所収されている。
 - (21) 金田民夫、「大西祝の文藝思想」、『美學』31(2)、美学会、1980年、5頁。
 - (22) 「『洒落哲学』を評す」の原本を参照できなかったが、全集掲載版と引用箇所には、若干の表記の違いがある。また、一箇所だけ「をかしみ」に「(ルデクロス)」と付け足されている。「ルデクロス」はludicrousである。
 - (23) 坪内の「大西祝」（「逍遙選集」第十二巻、441~446頁）では、坪内は大西の東京専門学校着任以前、評論を通じて「勝れた学識見の、又才徳の人格者と想像はしてゐた」としている。島崎藤村「桜の実の熟する時」には、「すぐれて広い額にやわらかな髪を撫でつけセンチイヴな眼付をした」S学士として描かれている。その講義は、「時々捨吉は身内がゾーとして来た。清しい、和かな、しかも力の籠った学士の肉声から伝わって来る感覚は捨吉の胸を騒がせた。」とされる。
 - (24) 東京朝日新聞22年1月10日に「文章哲学」が紹介され、文章規範のない「邦文の弊を救ふに対して果して如何なる較著の功を與ふべきや否やは之を知る能はずと雖も亦決して尋常兎園の物にあらざるべきを信ず」と評される。
 - (25) 「笑諷」にはThefudscrousと原語を添えているが、The ludicrousの誤植で、humourをChumourと誤植している。
 - (26) 「恰不好」は「不恰好」の誤植である。「素なるか原如し」も誤植か。
 - (27) 「諧諷」は「諷諧」とも印刷される。原文通り引用した。
 - (28) 目次では「嘻笑」となっている。
 - (29) 柳田泉、「『社会平権論』訳者 松島剛伝」、「明治初期翻訳文学の研究」、1961年、春秋社、東京、参照。
 - (30) 当時国内で流布した欧米の笑いに関する本の調査も必要である。
 - (31) 原文は、Book III, Chapter XIII; The ludicrous; 1 The causes of laughter; 2 Incongruity not always ludicrous; 3 The ludicrous caused by degradation of some person or interest, Theories of laughter: Aristotle, Quintilian, Hobbes, Campbell, Kant; 4 The pleasure of degradation referable (1) to the sentiment of power, or (2) to the release from constraint、である。

- (32)近代デジタルライブラリーには、「ユーマン」と「ユーマンス」の二冊があり、同一書である。ユーマンスはアメリカにスペンサー思想を広めた人物である。
- (33)註19、参照。
- (34)浦和男、「国木田独歩と笑いー「上等ポンチ」と「米国一口噺」ー」、『笑いと創造第6集』、2011年、勉誠出版、東京、402-403頁、参照。